

平成26年度沖縄群島病害虫発生予報第10号(1月予報)

I 1月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	30	40	20
平年並	40	40	40
低い(少ない)	30	20	40

(平成26年12月18日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	17.0	19.5	14.6	107.0	94.2

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

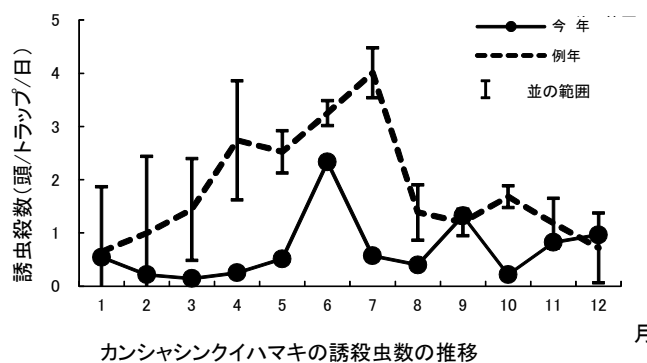
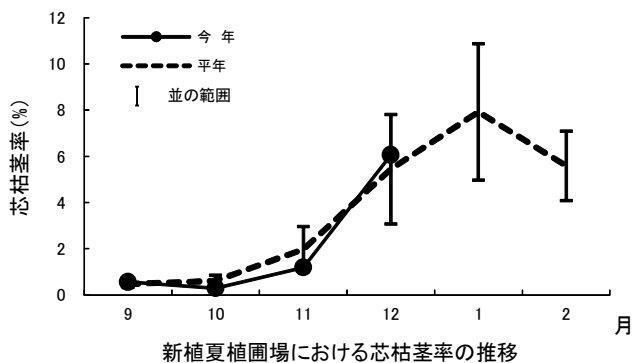
II 1月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

(1) カンシャシンクイハマキ

発生程度 : 並
予報の根拠

- 12月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は6.1%(前年4.1%、平年5.4%)と平年並であった。
- 12月のカンシャシンクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.0頭(前年0.8頭、例年0.7頭)と例年並であった。



<防除上注意すべき事項>

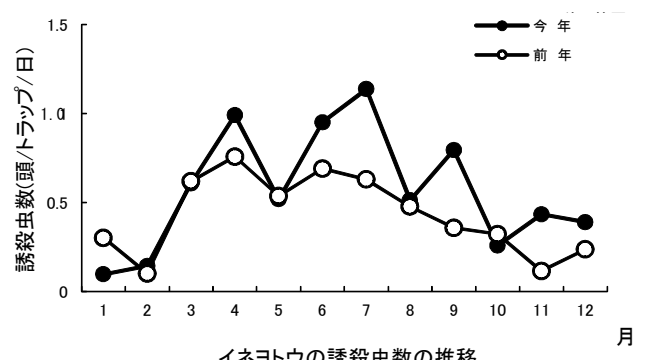
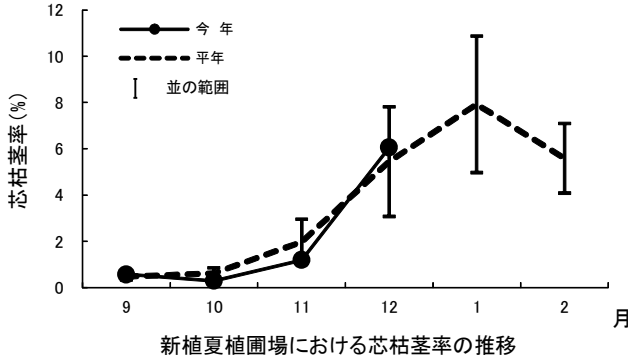
- ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 乳剤の場合は、葉鞘内に葉液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

(2) イネヨトウ

発生程度 : 並
予報の根拠

a 12月中旬の調査の結果、新植夏植ほ場における芯枯茎率は6.1%(前年4.1%、平年5.4%)と平年並であった。

b 12月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.4頭(前年0.2頭)であった。



<防除上注意すべき事項>

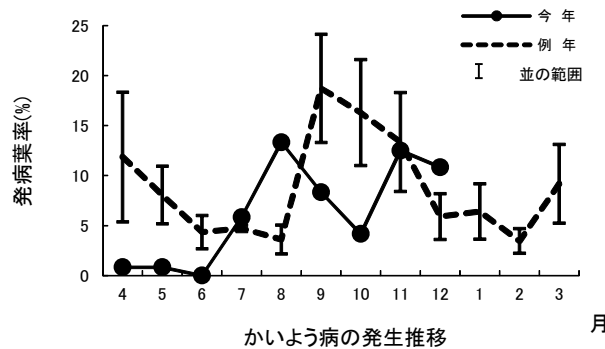
- a カンシャシクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
- b 平成26年度病害虫発生予報第6号(平成26年8月28日付)コラム参照。

2 シークワーサー

(1) かいよう病

発生程度 : やや多
予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病葉率は10.8%(前年6.7%、例年5.9%)と例年よりやや高かった。

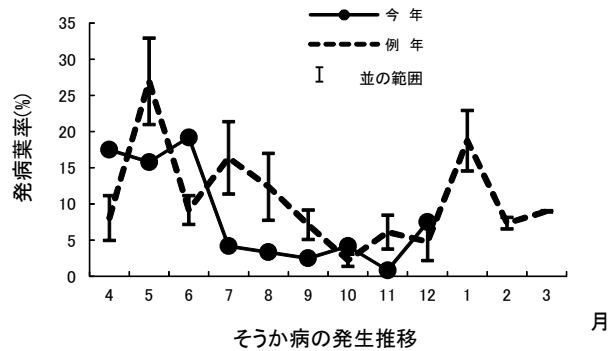


<防除上注意すべき事項>

- a 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- b ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

- (2) そうか病
 発生程度 : やや多
 予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病葉率は7.5%（前年2.5%、例年4.8%）と例年よりやや高かった。



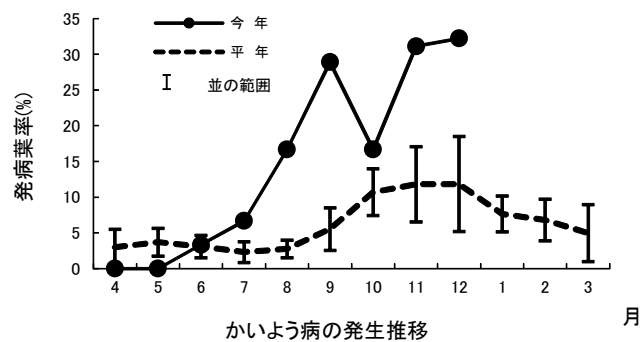
<防除上注意すべき事項>

- 本病は罹病葉・枝が伝染源となり、雨水によって伝搬される。
- 罹病葉・枝はできるだけ除去し、雨滴や露が早く乾くように園内の通風をよくする。
- 窒素肥料の過剰施用は軟弱な枝葉の発生を助長し、本病の発生を助長するので避ける。

3 タンカン

- (1) かいよう病
 発生程度 : 多
 予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病葉率は32.2%（前年6.7%、平年11.8%）と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

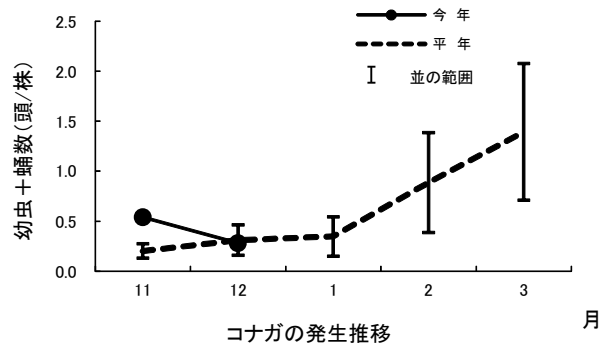
- 罹病した枝葉及び果実は、伝染源となるので除去する。
- ミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。

4 キャベツ

(1) コナガ

発生程度 : 並
予報の根拠

12月中旬の調査の結果、株当たり幼虫+蛹数は0.3頭(前年0頭、平年0.3頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- ほ場周辺のアブラナ科雑草の除去および収穫後の残さ処理を徹底し、ほ場管理に努める。
- 多発すると防除が困難になるので、低密度時に薬剤防除を行う。

○ 菌核病の防除対策

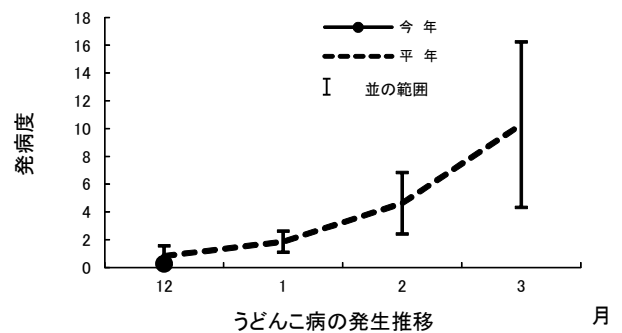
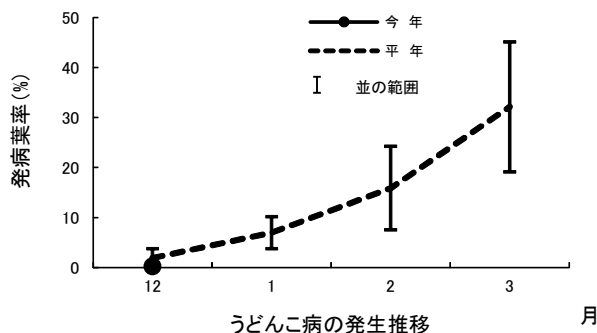
- 12月中旬の調査の結果、発病株率は0.04%(前年0%、平年0.03%)と平年並の発生であった。
- 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。
- 本号表紙およびコラム参照。

5 かぼちや

(1) うどんこ病

発生程度 : 並
予報の根拠

12月中旬の調査の結果、発病葉率は0.2%(前年0%、平年1.9%)、発病度は0.3(前年0、平年0.8)と、ともに平年並であった。

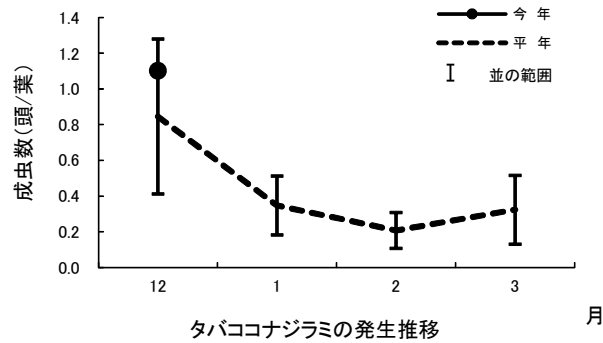


<防除上注意すべき事項>

- 発生源となる株元の不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- 着果期以降、草勢の低下に伴い被害が急激に広がる場合があるので、防除を徹底する。

(2) タバココナジラミ
 発生程度 : 並
 予報の根拠

12月中旬の調査の結果、葉当たり成虫数は1.1頭(前年0.04頭、平年0.8頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- ほ場周辺の雑草は発生源になるので除草を行う。
- 本種は葉の白化を引き起こし、また、多発すると防除が困難になるので、葉裏を観察し早期防除に努める。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。また、薬剤抵抗性の発達しにくい気門封鎖剤や微生物農薬を使用する。

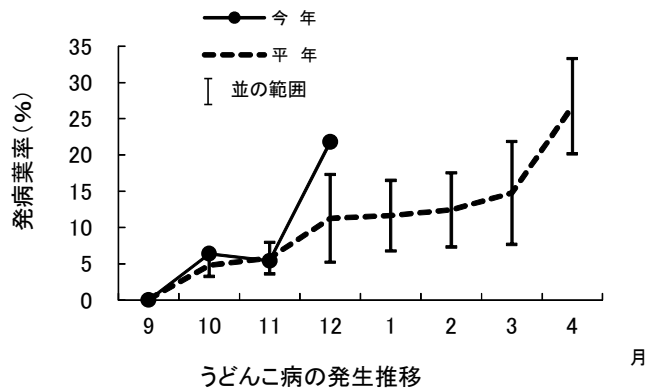
○ モザイク病の防除対策

- 12月中旬の調査の結果、モザイク病の発病株率は0.4%(前年0%、平年1.3%)と平年よりやや少なかった。
- 12月中旬の調査の結果、媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は0.01頭(前年0頭、平年0.3頭)と平年よりやや少なかった。
- ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
- 発病株は発生源となるので、みつけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。

6 きゅうり(施設)

(1) うどんこ病
 発生程度 : やや多
 予報の根拠

12月中旬の調査結果、発病葉率は21.8%(前年4.8%、平年11.3%)と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

老葉や病葉は発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分し、透光通風を良くする。

- べと病の防除対策
 - a 12月中旬の調査結果、発病葉率は4.0%（前年0.2%、平年1.1%）と平年より高かったが、発生は一部施設に限られた。
 - b 密植や過繁茂を避け、透光・通風をよくする。
 - c 被害葉は施設内から持ち出し処分する。
 - d 多発すると防除が困難になるので、早期発見・早期防除に努める。
- ミナミキイロアザミウマの防除対策
 - a 12月中旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.1頭（前年0頭、平年0.1頭未満）と平年よりやや多かったが、一部施設で特に発生が多かった。
 - b 本種は灰白色斑紋病や黄化えそ病の媒介虫である。
 - c 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
 - d 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
 - e 摘心や摘葉後の残渣は、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密閉し、施設外に持ち出し処分する。
 - f 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

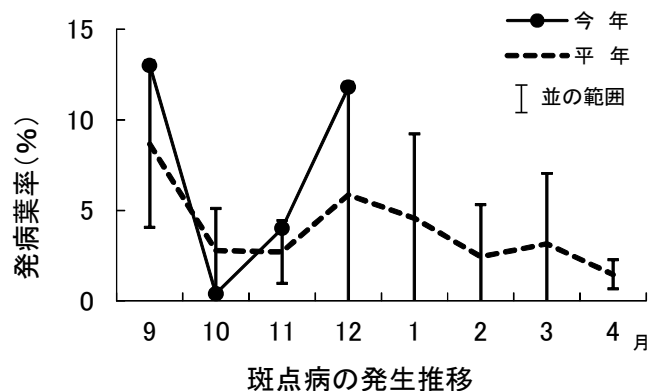
7 にながり(施設)

(1) 斑点病

発生程度 : 並

予報の根拠

12月中旬の調査の結果、発病葉率は11.8%（前年2.8%、平年5.9%）と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 老葉や病葉は発生源になるので除去し、ほ場外に持ち出して処分する。
- b 過繁茂を避け、透光通風を良くする。
- c 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- d 中～下位葉をよく観察し、初期発見・初期防除に努める。

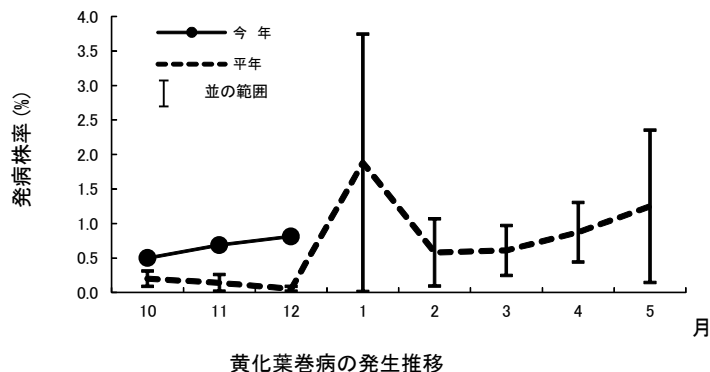
8 トマト

(1) トマト黄化葉巻病

発生程度： やや多

予報の根拠

12月下旬の調査の結果、発病株率は0.8%（前年0.1%、例年0.1未満）と平年より高かったが、発生は一部ほ場に限られた。



<防除上注意すべき事項>

- 発病株は感染源となるため、早急に抜き取る。抜き取った株は必ずビニール袋に入れるなどして密封し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 施設内外の野良生ネトマトは、本病の感染源および媒介虫であるタバココナジラミの発生源となるので、抜き取り密封処分する。
- 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- タバココナジラミの薬剤防除を行う場合は、マルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。

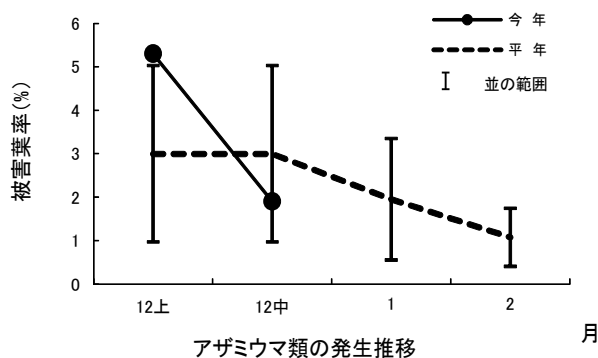
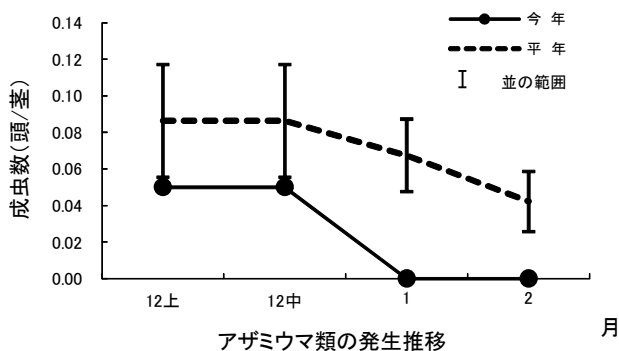
9 小ぎく(彼岸出荷用)

(1) アザミウマ類

発生程度： 並

予報の根拠

- 12月の調査の結果、茎当たり成虫数は上旬0.05頭、中旬0.05頭（前年0.17頭、平年0.09頭）と平年よりやや少なかった。
- 被害葉率は上旬5.3%、中旬1.9%（前年12.5%、平年3.0%）と上旬は平年よりやや多く、中旬は平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布を行う。
- 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる成長段階であっても、同時に防除を行う。
- 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。
- ほ場内外の雑草や収穫終了ほ場の残さは発生源となるので、早めに除去する。

- 白さび病の防除対策
 - a 病害虫防除員の報告によると、本島北部の輪ギクで本病の発生が確認されている。
 - b 多湿条件下で発生するので、不要な下葉、脇芽は除去し、通風をよくする。
 - c 発病葉は除去し、ビニール袋に入れるなどしてほ場外に持ち出し、焼却などの処分を行う。
 - d 発生時期には予防散布を行うとともに、葉をよく観察し初期発生を見逃さない。
 - e 防除効果を高めるため、薬剤耐性菌が発現しないようローテーション散布を行う。
 - f 栽培終了後は近隣ほ場や次作の発生源にならないよう、不要な株は速やかに処分する。